

## グローバルリスク雑感

谷口武俊

新型コロナ・パンデミックが3年目に入った。世界各国、厳しい2022年が始まった。毎年1月、世界経済フォーラム（WEF）とイアン・ブレイマー率いるユーラシアグループが、その年の「グローバルリスク報告書（GRR）」、「世界10大リスク」をそれぞれ公表する。筆者は2010年から、世界のリーダーや有識者はどのようなリスク・ランドスケープを描いているのか、関心を持ってきた。本稿では、GRRの概要を紹介し、思うところを述べ、連載最後としたい。

GRRは、世界の1000人ほどの有識者（ビジネス界、アカデミア、行政機関、NGO等）に対して、経済、社会、地政学、環境、テクノロジーに関連する37のグローバルリスクを示し、それらのリスク認識を調査分析したものである。その概要は以下のとおりだ。

今後3年の世界を見通すと、絶えず不安定で予期せぬ複数の事態が起きる（42%）、相対的な勝者と敗者を分ける方向に向かう（37%）、世界的に回復が加速する（11%）、破滅的帰結への臨界点に漸進する（10%）と回答。世界的な回復は、各国の政策優先順位付けの差異もあるため、不安定で不均衡であり、ワクチン接種率や医療体制の脆弱性も相まって、回復・成長機会を享受する国、逸する国に分かれていくと予測している。そして、新型コロナ禍以降、最も悪化したリスクは、社会的結束の侵食、暮らしの危機、気候変動対策（緩和・適応）の失敗、メンタルケアの悪化だという。

世界にとって重大な脅威となるリスクを時間軸で見ると、短期的（今後2年）には異常気象、暮らしの危機、気候変動対策の失敗、社会的結束の侵食、感染症、中期的（今後2～5年）には気候変動対策の失敗、異常気象、社会的結束の侵食、暮らしの危機、債務危機、そして長期的（今後5～10年）には気候変動対策の失敗、異常気象、生物多様性の喪失という環境的緊張・脅威から生じるリスク、続いて社会的結束の侵食、暮らしの危機、感染症の拡大という社会的リスク、以下人為的な環境災害、天然資源の危機、債務危機、地経学的対立との認識だ。

コロナ禍の爪痕は大きく、深い。特に、社会的結束の侵食、いわゆる社会的資本（信頼関係や規範やネットワーク）が失われていくことがグローバルに起きていることは、今後様々なリスクを生み出す、あるいは増幅する要因になるだろう。社会の亀裂は、労働市場の不均衡やデジタル・教育・技能の格差拡大で一層深まり、負のスパイラルに陥る可能性が高い。勝者と敗者を間近に見る日常がニューノーマルでは堪らない。ほぼ全ての有識者が懸念する地球環境資源に関わるリスクは言うまでもなく様々な形で物理的に顕在化しており深刻だが、信頼関係の悪化・喪失といったインタンジブルなリスクはグローバルリスクへの対処に不可欠な協調・協働という前提を揺るがすという意味でより深刻ではないだろうか。

政治・経済に目を転じると、グローバルなリーダーシップの欠如が一層鮮明化したGゼロの世界では、各地に地域紛争という地政学的リスクが点在している。これらは単に政治的側面だけでなく、エネルギーや天然資源や新興技術やサプライチェーンなどの側面も複雑に絡み、地経学的リスクでもある。これらのリスク領域で鍵を握るのが、新興技術・デジタル空間のガバナンスだ。GRRによれば、例えば人工知能利用（自律的兵器など）の領域で、グローバルガバナンスは、「始まっていない（20%）」、「初期段階（70%）」という認識だ。また、脱炭素化社会への移行、いわゆるトランジション・ガバナンスでは、政治・経済・社会・環境・技術リスクが複雑に連関しトレードオフ構造をもつため、無秩序に行えば国家間の分断を深刻化させることは必至だ。Gゼロ世界において、人工知能技術や宇宙技術やサイバー技術などの活用・規制、脱炭素社会への移行をグローバルにデザイン、構築、管理していく主体はいるのだろうか。

ウイルスにより私たちは繋がっていることを教えられた。脅威とともにその価値を知った。なぜ、社会的結束が侵食し分断に進むのか。むしろ、繋がりを利用し生き延びようとするウイルスに学ぶことが大事ではないのか。中屋敷均氏は“ウイルスはこの地球上に存在する、時に対立し、時に助け合い、変化し、合体する様々な生命体からなる「生命の輪」の一員である”という。対話・共考・協働の継続的实践で社会的資本を再構築していくところから再出発だ。ふと部屋の色紙に目が向く。

「人間が創った世の中、人間が解決出来ない事はない」（立川談志、1986年ナイロビにて）

（東京大学名誉教授＝技術リスク政策）